

宮沢賢治と子ども—『銀河鉄道の夜』をめぐる

秦 野 一 宏

<序>

ジョバンニが銀河鉄道の旅で出会ったかほるの年齢は「十二歳ぐらい」だと記されている。彼女との会話の調子や彼の受けている授業の内容などから察するに、ジョバンニとカムパネルラもほぼ、同じぐらいの年齢だろう。かほるの弟であるタダシは「六歳ぐらい」で、まだききわけがなく、駄々をこねたりすることもある。幼いタダシは、幸福とは何かといった態の話題にはまだついてゆけないけれど、ジョバンニたちはもう、そのような抽象的問題についても思いを馳せる年頃である。この年頃の子どもたちはひとをあざけったり、妬ましく思ったりする自分を発見して憂鬱になることもある。しかし、いつまでも悩み続けることはない。しばらくするとけろりとしている。かなしい時には涙がこみあげてくるし、うれしい時は飛び跳ねる。小さな子と同列に扱われるのを嫌い、時に背伸びをして、大人のような振る舞いをすることもある。仲間とおしゃべりしたり遊んだりするのも大好きだ。好奇心も旺盛で、新しいものをみるとわくわくする。『銀河鉄道の夜』とは、銀河の旅を通して、ジョバンニがそんなふつうの<子ども>に返ってゆく話である。

1.

『銀河鉄道の夜』の主人公ジョバンニは孤独で、辛い生活を余儀なくされている。原因は漁に出たまま帰ってこない父親にあるが、初期形¹では語り手もジョバンニも、その因果関係をはっきりと意識し<声>として伝えているのに対し、最終形になると、その声は消えてしまっている。なぜだろうか。

初期形では、父親の不在については次のように、語り手によって説明されていた。ジョバンニのお父さんは「らっこや海豹をとる、それも密猟船に乗って

ゐて、それになにかひとを怪我させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入っているといふのでした。ですから今夜だって、みんなが町の広場にあつまって、一緒に星めぐりの歌を歌ったり、川へ青い烏瓜のあかしを流したりする、たのしいケンタウル祭の晩なのに、ジョバンニはぼろぼろのふだん着のままで、病気のおっかさんの牛乳の配られて来ないのをとりに、下の町はづれまで行くのでした²」。父親が帰らないために母親は心労で体の具合を悪くするし、家の収入も途絶えたので、ジョバンニは父親に代わってお金を稼がねばならなくなったのだ。「ですから」という一つの接続詞によって、すべての不如意の原因が父親にあることが明示されている。また初期形では、ジョバンニのその辛い胸のうちが、彼の内心の声としてはっきりと伝えられていた。－「(あゝ、もしぼくがいまのやうに、朝暗いうちから二時間も新聞を折ってまはしにあるいたり、学校から帰ってからまで、活版処へ行って活字をひろったりしないでいいやうなら、学校でも前のやうにもっとおもしろくて、人馬だって球投げだって、誰にも負けないで、一生けん命やれたんだ。それがもういまは、誰も僕とはあそばない。ぼくはたったひとりになってしまった)」。新聞配達や活字拾いは、自分以外に稼ぎ手がないからしかたなくしているのであって、もしお父さんが帰ってきてお金を家に入れてくれるようになれば、せずにすむ。そうなれば学校へ行くのもおもしろくなり、さびしい思いをしないでもすむと、ジョバンニは考えているのだ。この個所と、最終形で唯一仕事の辛さを訴えている次の一節を比べてみてほしい。

「(…) ころころぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあはれなやうな気がするのではした」

最終形で新たに書き加えられた「午后の授業」の一節である。授業で銀河は何かとの先生に質問され、自分と同様にカムパネルラも「返事」をしなかった。「みんな」とはきはき遊べないことも辛いにはちがいないが、それ以上にジョ

バンニにとっては、遊べないことをカムパネルラが「気の毒がって」いるということが問題なのだ。仕事が辛くなかったら、カムパネルラも気の毒がることはなかったのに、といった仮定法の文章構造になっていない点に注意したい。返事ができなかった原因はさかのぼれば父親の不在にあるにもかかわらず、ここには初期形にあった、辛さの原因を作った者として父親を指弾するようなニュアンス含みの言い回しはない。ジョバンニは、＜尊敬する父＞の非を問うような言い回しを迂回して「考へ」ている。

最終形でも初期形でも、ジョバンニの家の貧しさはまったく変わらない。だからこれまで多くの評者は、最終形でジョバンニが自身の辛さを貧乏の所為にせず、父親を責めもしなくなったことを、たくましくなった、あるいは自立した証しだと考えてきた³。なるほど、最終形のジョバンニは愚痴をこぼさず、彼と視点を共有する語り手も、あえて「ぼろぼろのふだん着」には言及しない。一見すると彼は、にわかにな成長したかに見える。しかし、子どもがけなげで、大人から見てもの分りのよい＜よい子＞に見えるのは、本来の自分を押し殺している徴ではないか。最終形で書き加えられた「活版所」の章では、ジョバンニは計4回、お辞儀をするが、この執拗なお辞儀の場面が強調するのは、「生き生きとした少年らしさ⁴」ではなく、大人たちに混じって働くうちに身につけた計算ずくのそつ⁵のなさである。彼が仮面をかぶり、ある種の演技をしているのは疑いない。

初期形から最終形になって削除されたものの中には次のような声もあった。

「(今日、銀貨が一枚さへあったら、どこからでもコンデンスミルクを買って帰るんだけど。ああ、ぼくはどんなにお金がほしいだらう。青い苹果だってもうできてゐるんだ。カムパネルラなんか、ほんたうにいいなあ。今日だって、銀貨を二枚も、運動場で弾いたりしてゐた。／ぼくはどうして、カムパネルラのやうに生れなかったらう。カムパネルラなら、ステッドラーの色鉛筆でも何でも買へる。(…)」

いかにも子どもらしい愚痴である。滋養を摂らねばならない病気の母にコンデンスミルクすら買ってやれない、学校で必要な色鉛筆も足りない、と嘆くだけ

ならばふつうの愚痴だが、ジョバンニはここで、自分のほしくてたまらない「ステッドラーの色鉛筆」を持ち出しているのだ。おそらく、最終形のジョバンニだって、高級な「ステッドラーの色鉛筆」を使って野原や家をスケッチしてみたいに違いない。しかし、そのように望むことは、結果的に、尊敬している自身の父を責めたり、貶めたりすることになる。最終形では、子どもらしい愚痴は圧殺されると同時に、父親に係わってくるある種の思いは触れてはならないタブーとして抑圧され、意識下に閉じ込められるのである。

抑圧されるのは父親に係わる秘められた思いだけではない。最終形では、＜カムパネルラ＞にも圧力がかかり、無意識的に変形されている。

初期形のジョバンニは、「(ぼくはどこへもあそびに行くところがない。ぼくはみんなから、まるで狐のやうに見えるんだ)」という一節からも分かるように、仲間の「みんな」から排除され、ひとりぼっちでいることが辛くてたまらなかった。最終形でも仲間からはじきだされている状況に変わりはないが、辛さはそれほどのものではない。最終形のジョバンニは、自分がひとりぼっちだとは思っていないのだ。なぜならば、彼の心の中には常にやさしいジョバンニがいて、慰めてくれるからである。すでに引用した「午後の授業」の一節を思い出そう。「……カムパネルラがそれ〔ジョバンニの辛さ〕を知って気の毒がつてわざと返事をしなかったのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあはれなやうな気がするのです」⁵。こちらが好きだと、相手もこちらを好きになはずだと思ふのか、あるいは、好かれないという願望が強すぎると、事実を歪めてしまうものなのか、どちらにせよ、ジョバンニはカムパネルラが親友だと信じきっているように見える。「カムパネルラをぼんやり出すこと」というメモ書きもある⁵が、じっさいは、彼のジョバンニに対する態度は、いつもあいまいなものである。教室で手を上げながら、もじもじ立ち上がったまま答えができなかった理由もよくわからない。先生の「ほんたうは何かご承知ですか」という問いかけに、答えを知っているはずのジョバンニが答えなかったのも、自分も「ほんたう」に知っているとは答えにくかったのかもしれない⁶。ただ、ジョバンニの方は、彼が返事をしないのは自分のことを気の毒に思ってくれているからだと決めつけ、彼も「あはれ」だなんて考えている。これはもうどうみても無邪気な子どもの発想ではない。ジョバンニは自分だけで

なくカムパネルラも憐れな者だと仮想することで、自分とカムパネルラを一体化し、お互いがずっと同じ感情を分かち合っていると感じていたのだ。カムパネルラが自分のことをそれほど気にかけていないかもしれないという思いを、絶対に受け入れたくないのである。

カムパネルラに固着することで孤独に耐えようとするこのジョバンニの心の戦略を明確にするために、最終形では二人の関係が修正されている。初期形では、お金持ちで勉強もできるカムパネルラは、ジョバンニが友達になりたいと切に願う憧れの人であった（「ぼくがカムパネルラと友だちだったら、どんなにいいだろう」）。一方、最終形では、じっさいカムパネルラはかつてジョバンニの友だちであった。ジョバンニはカムパネルラの家で、父親の書斎から隠れてこっそり持ち出した写真集を広げ、「まっ黒な頁いっぱい白い点々のある美しい」銀河の写真を「いつまでも見た」こともある。また、学校から帰る途中たびたびカムパネルラの家に立ち寄り、いっしょにアルコールランプで汽車を走らせたこともある。いつかアルコールがなくなった時に石油を使ったら、罐が煤けてしまった。どちらが石油を使ってみようと言い出したのかはわからないが、うまく走るかどうかに二人は息をのんで見守っていたことだろう。罐が煤けたと気づいた時にはおそらく、思わず顔を見合わせたにちがいない。彼らはわくわくどきどきしながら過ごした二人だけの、懐かしい記憶を共有している。最終形では、このような二人だけの記憶がジョバンニの心の支えになっていた。最終形のジョバンニには、カムパネルラが自らの意思で自分との間に溝を作ったとは信じられない。自分とカムパネルラを結ぶ糸は切れてしまったのだとは、到底思えない。思いたくないのだ。

最終形においてジョバンニがカムパネルラをどのように感じているかを知るために、もう一つの例をあげよう。引用は、ジョバンニが母親相手に自分とカムパネルラの懐かしい過去を回想した、そのあとの一節である。

『「いまも毎朝〔カムパネルラの家〕新聞をまはしに行くよ。けれどもいつでも家中まだいいんとしてゐるからな。』

『早いからねえ。』

『ザウエルといふ犬がゐるよ。しっぽがまるで箒のやうだ。ぼくが行くと鼻

を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もっとなついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ。』

『さうだ。今夜は銀河のお祭りだねえ。』

『うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。』

『あゝ行っておいで。川へははいらないでね。』

『あゝぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行ってくるよ。』

『もっと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒なら心配はないから。』

『あゝきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしめて置かうか。』

何でもない受答えの中に、ジョバンニのさびしさが滲み出ている。創作が美的な深さに達するためには「諸作無意識中に潜入する」必要があると考え⁷、常に「無意識」について思いめぐらしていた賢治ならではの描出である。今もジョバンニは毎日、カムパネルラのことを想っているのだが、彼と言葉を交わすこともない。飼い犬ザウエルに関して弁を弄しているが、この犬がジョバンニになついているのは、カムパネルラと仲よくしていた頃のなごりなのかもしれない。そして、どうやら彼はザウエルからの連想で、烏瓜を流しに川へ向かうカムパネルラとそのお供に付いた犬の傍らに、にこやかな顔で歩く透明な自分の姿をついつい思い描いてしまったようだ。しかしこの饒舌は勢いがつきすぎて、母親には、息子とカムパネルラは今も大の仲よしで、今夜も二人は示し合わせて烏瓜流しに行くと言っているように聞こえる。

引用個所の少し前では、ジョバンニは母親に、みんなが帰らぬ父をあてこすって悪口を言うのと訴えていた。母親は、みんなが息子をいじめているのではないかと心配したが、それを察して、ジョバンニはすぐさま言い訳をする。「みんな」は自分に悪口を言うけれど、カムパネルラは「決して云はない」。「カムパネルラはみんながそんなことを云ふときは気の毒さうにしてゐるよ」と。「気の毒さうに」見ているとは、よく考えてみれば、やさしい性格であるという意味と傍観していて悪口をとめないという意味の両方にとれるあいまいな表現だが、母親はもちろん、ジョバンニが伝えようとする前者の意味にとった。だから彼女は、やさしいカムパネルラがいっしょに行くのなら安心だと思ったの

である。一方ジョバンニは、「カムパネルラさんと一緒なら心配ない」という母親の言葉に、彼女が誤解していると知りながら、「あゝきっと一緒だよ」と相槌を打ってしまう。除け者にされないかと案じる母親を安心させたいという思いも働いたのだろうが、それ以上に、「一緒」であってほしいというジョバンニ自身のせつない願望が、嘘を呼び込んだのだ。あわい期待を胸に抱きながら、「一時間」ではなく「一時間半」後に戻ると母親に言い残して、ジョバンニは櫓のまっ黒にならんだ町の坂を下りてゆく。

このあと、ジョバンニは牛乳屋に向かう途中、ザネリとすれちがう。ジョバンニはザネリに烏瓜流しに行くのかと言葉をかけるが、ザネリはその言葉を見做して、後ろから、「投げつけるように」、「お父さんから、らっこの上着が来るよ」と叫ぶ。ジョバンニは「ぱつと胸が冷たくなり、そこら中きいんと鳴るように」思った。ただ相手はザネリ一人である。このこにらしい男の子の悪口に対しては、一瞬の躊躇があるにせよ、「何だい。ザネリ」と「高く叫び返す」こともできるし、心の中だけではあるけれども、敵意をむき出しにして、悪態をつくこともできる。「走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかだからだ」と。その後、牛乳屋を出て、川へ向かおうとしている時に、ジョバンニはまたザネリと会い、再度悪口を言われるが、今度は状況がまったく違う。ザネリは烏瓜流しにゆく仲間といっしょで、しかもその一団には、カムパネルラも加わっていたのだ。

カムパネルラの態度はここでもあいまいである。排除そのものには加担しないが、さりとてザネリを諷めるわけでもない。カムパネルラはたしかに「気の毒さうに、少しわらって、怒らないだらうかといふやうに」ジョバンニの方を見ていたけれど、じっさいには声もかけないまま、ザネリたちとともに離れてゆくのだ。－「カムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向こふにぼんやり橋の方へ歩いて行ってしまったのです。ジョバンニは、なんとも云へずさびしくなって、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてゝ、わあわあと云ひながら片足でぴょんぴょん跳んでゐた小さな子供らは、ジョバンニが面白くてかけるのだと思ってわあいと叫びだしました」。ひょっとしてふり返り、自分のために何か言ってくれるのかと、ジョバンニは一瞬かすかに期待したのだろうが、その期待もあっけなく打ち砕かれてしまった。しかも、こんな事態になっ

てさえ、彼はカムパネルラのつれなさを責めることも、嘆くこともできない。ザネリは悪いと言えても、カムパネルラが悪いとはどうしても言えない。彼から切り離され、ほんとうにひとりぼっちの自分と向き合うことが怖いのである。「ぼくはみんなから、まるで狐のやうに見えるんだ」という初期形のジョバンニのつぶやきが蘇ってくる。さびしさのあまり走り出したジョバンニの横では、小さい子たちが、わあいと叫んでいる。ジョバンニの孤独な姿は、この無邪気で、はしゃぎまわるのが大好きな小さな子たちの誤解に縁どられることによって、読者の胸に刻み込まれる。

2.

〈二人だけの世界〉は揺らぎ、消えかかっているにもかかわらず、願望だけは手放すことができない。家に戻らず、黒い丘の小さな林の小道をどんどのぼって行って、天気輪の柱のところまで来ると、そこでジョバンニは眠り込み、夢の中で、現実では叶えられることのない願望を実現する。

ふと気がつくと彼は銀河を走る汽車の中にいた。ジョバンニは、ザネリや他の級友たちと誘い合わせて旅に出たのだとぼんやり思いはするが、それはみんな仲よくしなければならぬという道徳的な意識の現れで、心の底ではカムパネルラと二人きりで旅することを望んでいたのである。その望み通り、カムパネルラだけがやって来て、ザネリたちは銀河鉄道の汽車の発車時刻に間に合わなかった。銀河鉄道の汽車の燃料についてカムパネルラが、「アルコールか電気だらう」と言っているのはかつての汽車遊びを想い起こさせる。乗った汽車の中で乗客たちが談笑しながらりんごを食べているのは、天気輪の下で野原を走る汽車を眺めたことと関係するのだろう。汽車の中の旅人たちは「苹菓を剥いたり、わらったり」しているのだらうと想像して、ジョバンニは「何とも云へずかなしくなっ」たのだから。さらに、カムパネルラが銀河ステーションで手渡されたという黒曜石でできた銀河の「地図」は、ジョバンニが時計屋でみた「星座早見」を連想させる（「ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たやうにおもひました」）。なにより、ジョバンニは「星座早見」に描かれた「獣」や「勇士」のいる中を「どこまでも歩いて見たいと思って」いた。またジョバンニは眠りに入る直前、夜空の白い帯をみて、それを林や牧場がある「野

原」だと想像していた。言い換えれば、彼は、まさに自分が思い描いていたような銀河を、＜友人＞のカムパネルラと二人で憧れの汽車に乗り、りんごを食べたり談笑したりする乗客とともに旅することになるのである。二人で光る銀河を見て「まるでね上がりたくないくらい」愉快になったり、天の川の「きれいな水」や「野原」に光る美しい「三角標」をみて、「どきどきし」たりするのも、彼の願いが夢の中で叶えられたことを物語っている。

とはいえこの旅は、ジョバンニひとりが作り出した単純な夢ではない。「幻想第四次の銀河鉄道」を走るというこの汽車は、ジョバンニの願いを叶えるためのものであると同時に、死者を天上に送り届けるためのものでもある（「死者」といっても、ジョバンニの前には生きた者として出現するのだが……）。ジョバンニの夢である限り、彼だけはどこでも勝手にゆける「切符」をもっているけれども、死者として乗り込んだカムパネルラの場合は、すでに行き先が決定されている。「ほんたうの」幸いが何かと、いくら自身に問いかけようとも、天上の予め定められた場所にやって来ると、とたんに現世の疑問は掻き消える。カムパネルラが「ほんたう」の天上だと言って降りたその場所は、ジョバンニにはぼんやりけむっているばかりで、カムパネルラが見つけたという母親の姿も見ることができない。たとえ自身の夢の中であっても、生者であるジョバンニには、自分がどこへ向かうのか、その行き着く先はわからぬままなのである。

さて、死者を天上に送り届けるために走る汽車であれば、ジョバンニの意思とは無関係に、カムパネルラ以外の死者ももちろん乗り込んでくる。また、銀河を走ることを考えれば、銀河で働く人々も乗り合わせることもある。だからこそ、ジョバンニは、現実ではありえなかった思いがけない出会いを体験することができる。もしもジョバンニが見た夢が、我々がふだん見るような通常の夢でしかないのであれば、そこに現れる他人は結局のところ、ジョバンニが生み出した幻影でしかないだろう。所詮は夢の旅だ、ということになる。しかしこの旅には、ジョバンニと同様の独立した自己をもつ、文字通りの他人が登場する。この他人がジョバンニの旅を特異なものにするのだ。他人との出会いによって、ジョバンニはこれまで意識下に淀んでいたものを意識することとなり、＜父親＞と＜カムパネルラ＞に対する関係も変わってゆく。この他人の中でも

とりわけ重要なのが鳥捕り、かほる、カムパネルラである。

鳥捕りが銀河鉄道の汽車に乗り込んでくる前に、ジョバンニとカムパネルラは白鳥駅での停車時間を利用して、プリオシン海岸に降り立ち、そこで化石を発掘中の「大学士」に会っている。彼はジョバンニとカムパネルラを参観者と見て、海岸のいろいろな化石について詳細に説明をしてくれた。カムパネルラは旅の始まった当初は、水筒とスケッチ帳を忘れてきたことを悔やんでいたが、それはまさに、ジョバンニが強く望んでいた二人だけの楽しい遠足のひとこまである。この大学士と別れ、汽車に戻り、もとの車室の席に座っていると、「茶いろの少しぼろぼろの外套」を着た赤ひげの鳥捕りが、車内に入ってくる。彼はジョバンニに「ここへかけてもようございますか」と許しを得て、網棚にゆっくりと荷物を置いた。ジョバンニは「ええ、いいんです」と挨拶はしたものの、「なにか大へんさびしいやうなかなしいやうな気がして」黙り込む。なぜ突然さびしさに襲われたのか、この時点ではわからないが、鳥捕りと別れてからジョバンニは気づく。

「僕はあの人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。』ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないとおもひました」

ジョバンニには、この鳥捕りが自分たち二人に近づいてきたことで、カムパネルラとの会話が弾まなくなり、せつかくの二人の楽しい旅がだいなしになるように思えたのだ。鳥捕りはここでザネリと重なる。カムパネルラが乗り込んできた銀河ステーションあたりでは、ジョバンニは、遅れているというザネリを待てようかと言っていた。しかしほんとうは、ザネリさえいなければ、カムパネルラも自分ときまわずならず、ずっと仲よくできたのではないかと心のどこかで感じつつけていた。ジョバンニはずっとザネリたちから排除されていると恨みに思っていたが、彼自身も心の中では、ザネリを排除していた。人を排除する、その無意識的な自身の心の動きを、彼は鳥捕りの闖入によって「はじめて」意識化できた。自分がザネリに何を感じていたか、彼は鳥捕りと会って「はじめて」口にすることができたのである。

鳥捕りにすすめられ、「押し葉」にした雁を食べる時には、ジョバンニは礼も言わずにこんなことを心の中で考えている。

「(なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでゐるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐるのは、大へん気の毒だ。)」

ジョバンニの鳥捕りに対する言葉遣いはぞんざいで、態度もじつにそっけない。相手の問い返しにも、「どっちでもいいと思ひながら」答えている。「わたくしどもは失礼いたします」などと、へりくだった物言いをしていた大学士に対する態度とは大違いである。この特別な人に比べると、鳥捕りも「どこかそこの野原の菓子屋」同様、見下されるふつうの人の一人にすぎない。

大学士と言えば、ジョバンニは彼に、牛の祖先である「ボス」の化石を標本にするのかと尋ねている。そして鳥捕りにもジョバンニは同じように、捕まえた鷺を標本にするのかと尋ねている。「標本」というものにこのように強い関心を示す⁸のは、彼の父親が学校に寄贈した蟹の甲羅やとなかいの角が、「標本室」に展示されているからである。「今だって」あるというその標本は「不在の父の存在の証し⁹」であると同時に、父が善い人、「監獄」などとは無縁の立派な人であることの証しでもある。「六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室に〔その標本を〕持って行くよ」と、ジョバンニは誇らしげに母に話してもいた。ジョバンニは、その意味深い「標本」を持ち出すことで、知らずしらずのうちに、対話の相手を自身の尊敬すべき父親と比べているのである。ジョバンニの問いかけに対し、大学士は「ボス」を「標本」ではなく、「証明」に使うと説明し、鳥捕りは、「鷺」は「標本」ではなく、みんなが「たべる」ものだと答えた。ジョバンニは「証明」のためだと答えた人には尊敬のまなざしを注ぎ、「たべる」ものだと答えた者は「ばか」にする。あたかも「標本」とどう関係するかを基準にして、相手が父より上位にいるのか下位にいるのかを測っているかのようだ。ただ、ジョバンニの父親の仕事は猟師で、標本作りではない。彼も鳥捕りと同じように、おそらくは殺生の負い目なく、生き物を

獲って売ることを生業にしていた。「標本」を作ったことからすれば、彼の父は学問に打ち込む学者と同列に置かれるが、生き物を獲って金を稼ぐ点では、鳥捕りと同列だ¹⁰。

ジョバンニは父が学者のように「標本」を作ったことを誇らしく思っているが、もちろん本物の学者の前では父の威光も色あせる。ここで想起させられるのは、「博士」と呼ばれているカムパネルラの父である。鳥捕りをばかにしたジョバンニはおそらく、父を誇らしく思うと同時に、心ひそかに、カムパネルラの父親と比べれば、見劣りがすると感じていたにちがいない。じっさい、カムパネルラの父親には「書斎」があり、そこには銀河の美しい写真が掲載された「巨きな本」もあった。その本をカムパネルラに見せてもらった時には、書斎にはこのような本がいっぱいあるんだろうな、とうらやましく思ったことだろう。どうしてカムパネルラのように裕福な家に生まれなかったのかと初期形のジョバンニはこぼすが、最終形のジョバンニは、どうして知性あふれるカムパネルラの父のような人が自分の父親でないのかという思いもあわせもっていた。

ジョバンニの鳥捕りに対する態度はしかしながら、彼の話をあれこれと聞いているうちにしだいに変化してゆく。この場面ではまだ、「ばかにしながら」売り物をもらって食べているのが「気の毒」だと感じているだけだが、時の経過とともに、ジョバンニは鳥捕りを新たな眼で見るようになる。そして最後にはこれまでのすべての会話をふり返って、相手の存在そのものを「気の毒」だ思うようになるのである。

「ジョバンニはなんだかわけもわからずにはかとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。驚をつかまへてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたやうに横目で見てあはてゝほめだしたり、そんなことを一一考へてゐると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持つてゐるものでも食べるものでもなんでもやってしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つゞけて立って鳥をとってやってもいいゝといふやうな気がして、どうしてももう黙つてゐられなくなりました。ほんたうにあなたの

ほしいものは一体何ですか、と訊かうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうせうかと考へて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした」

ジョバンニにとってはわけがわからないかもしれないが、この直後にジョバンニがもらした言葉を重ね合わせれば、なぜ鳥捕りがこんなふうに「気の毒」になったかは明らかなだ。彼は言った。「どこへ行ったらう。一体どこでまたあふのだらう。僕はどうしてもう少しあの人に物を言はなかったらう」。つまりは、別れるのが名残惜しいほど、黙っていたのが悔やまれるほど、ジョバンニは鳥捕りと心が触れ合ったのだ。「がさがさした、けれども親切さうな」声、「なつかしさうに」笑う、その笑い方、子ども相手に「すこしおづおづしながら」話をする遠慮深い、控えめな性格。カムパネルラが「喧嘩のやうに」訊ねても、怒ったでもなく彼は、「頬をびくびくしながら」返事をしてくれた。ジョバンニは自分の感情が大きく動いたことを、未熟な少年らしく鳥捕りの話した内容と関係づけようとしているが、それは彼の勘違いである。鳥捕りの話したことにはさしたる内容はない。重要なのは、鳥捕りが、偶然乗り合わせただけの子どもに何のけれどもなく身の上話をしたということ自体、あるいはその話をする時の彼の言葉の調子や表情、自ずから伝わってくる何かなのである。ジョバンニは鳥捕りの素朴なやさしさを直感的に感じることはできるのだが、言葉にできない。あるいは言葉にすれば、なんだかの外的なものになってしまう。

さらに、鳥捕りと別れたあとにも、ジョバンニが「気の毒」と考える人が現れる。それは、船が沈没する時の様子を語った青年の話を聞いて、ジョバンニが連想的に思い描く人である。

「(あゝ、その大きな海はパシフィックといふのではなかったらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかって、たれかゞ一生けんめいはたらいてゐる。ぼくはそのひとにほんたうに気の毒でそしてすまないやうな気がする。ぼくはそのひとのさひはひのためにいったいどうしたらいいのだらう。)」

青年の心の葛藤には反応せずに、沈没した寒い海で働く「たれか」を連想するというのは、いかにも幼く思える。しかしそれは、ジョバンニが無意識の中で父親のことを思いつづけていたからにほかならない。第2次稿では、その北の海で働いている人は「私のお父さん」とはっきりと名指され、父が烈しい寒さとたたかっているのは、自分に「厚い上着」を着せようとしているためであると記されていた。第3次稿以降「お父さん」を「たれか」と言い換えたのは、同じ「気の毒」な人として、父親と鳥捕りを同列に置くためである。ジョバンニはかつては、自分のことをいつも心配し、自分のために苦勞してくれている特別な父を尊敬していた。が同時に、心の奥底では、帰らぬ父を責めてもいた。カムパネルラの父親のような知的な父でなく、「どこかそこの」ふつうの人であることにも、気づかぬうちに、なにかしら不満をもっていた。しかし、鳥捕りと出会い、彼に対する無意識的な負の感情を意識し悔い改めたあとは、＜ふつうの人＞は、その意味が変わり、環境が悪かろうと、世間の評価が低かろうと頓着することなく、もくもくと自身の仕事に打ち込む敬愛すべき人となる¹¹。ふつうの人がふつうの人でなく、＜特別な人＞になったのだ。これまでは自分自身のことを父親よりもかわいそうだと思っていたジョバンニだが、今や、自分を度外視して辛い労働にいそむくふつうの＞父親を「気の毒」だと感じるようになる¹²。鳥捕りに対する感情の変化は、父親像をも変えてしまったのである。

3.

鳥捕りとの出会いのあとに、かほるとの出会いが来る。

鳥捕りは最初、カムパネルラとの楽しい旅を邪魔する者と思われたが、カムパネルラと仲よさそうに話すようになるかほろはそれ以上で、ジョバンニは彼女のために嫉妬心さえ呼び起こされる。かほろの方はジョバンニが膨れっ面をしているのが気にかかったのか、ジョバンニとカムパネルラが顔を出している窓にいっしょに顔を出して、鳥がたくさんいるだの、空がきれいだのと積極的にジョバンニに話しかけてくる。しかしジョバンニは「生意気ないやだい」と思いながら、黙って、頑なに空を見上げたままだ。女の子はなすすべもなく、「ほっと息をしてだまって」席に戻る。その時、カムパネルラはと言えば、「気

の毒さうに窓から顔を引っ込めて」地図を見てはいるが、しばらくすると、またかほると話をはじめ。カムパネルラのあいまいな態度はここでも変わらない。ジョバンニは「こゝろもちをきれいに大きくもたなければいけない」と反省してはみるのだが、波打つ感情は静まらない。

「(あゝほんたうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだらうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ)」／「(こんなしづかないゝとこで僕はどうしてもっと愉快になれないだらう。どうしてこんなにひとりさびしいのだらう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗ってゐながらまるであんな女の子とばかり談してゐるんだもの。僕はほんたうにつらい。)」

前半の引用と後半の引用の間には、カムパネルラがなだめようとジョバンニに話しかける場面があるのだが、それでもジョバンニの気持ちはなおらない。それどころか、気分を損ねて、カムパネルラに不満をもらさえるのである。カムパネルラは自分と「いっしょに」汽車に乗っているのに、あとから乗り込んできた女の子とばかり話すのは「あんまりひどい」と。ジョバンニから見れば、かほろは自分の親友を横取りしたわけで、その意味でザネリと同罪である。ただ、これまではカムパネルラ本人には何も言えなかった。それどころか、ほんとうは彼も辛いのだと、心の中を慮って庇い立てていた。が、今は違う。ザネリ以上のライバルかほろの出現によって、ジョバンニはもう一つの抑圧から解放されたのだ。これまでずっと言えずにいた不満を今始めて、ストレートに、子どもらしく、彼は声にすることができたのである。カムパネルラはジョバンニにとってもはや、自分のことをいつも「気の毒」に思ってくれるカムパネルラではない。鳥捕りとの出会いによってかつての父親像が変わったように、かほろとの出会いによってカムパネルラ像も変わる。彼も他の人間と同じように、自身の感情をもった独立した個なのだということを、ジョバンニは自覚した。

ところで、落ち込んだ気分のほうはどうなるか。鳥捕りの場合は、彼の善良さを感じとり、〈ふつうの人〉として受け入れることで辛い気持ちは払拭され

たけれども、今回は、カムパネルラの気持ちに離れてゆく現場を目の当たりにしているので、気分は沈んで回復しそうにないように見える。しかし、＜子ども＞の気分は、ちょっとしたことで変わるのだ。インディアンが突然現れて狩をするのを見ただけで、「こゝろもち」が明るくなってくる。銀河を走る汽車が小さな小屋の前を通る時、小屋の前にひとりの子どもが立っていた。その子は「しょんぼり」してジョバンニのほうを見ていたが、ジョバンニにはその姿を目にして「思はず」、「ほう」と叫ぶ。作者は何も説明せずにやり過ごすけれど、その子はいささきまでさびしさを抱え込んでいたジョバンニ自身ではないか。その当のジョバンニがもう、さびしかった自分に驚いている。子どもの気分の変わりやすさとはそういうものだ。汽車がスピードをあげたために車中の人たちがうしろに倒れそうになりながら腰掛にしがみつくのを見た時には、ジョバンニは「思はず」カムパネルラと笑ったし、天の川で発破があった時には、カムパネルラはこおどろし、ジョバンニはもうはねあがりたいくらい、気持ちが軽くなった。「空の工兵大隊だ。どうだ、鰻やなんかどまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いゝねえ」。歓喜の言葉も口を衝いて出てくる。

宮沢賢治には『さいかち淵』という、やはり「発破」を描いた作品がある。大人たちは発破を使って魚を捕ろうとするのだが、そのことを察知した子どもたちは、大将格である「シュッコ」（舜一）の手引きのもと、先回りして隠れ、流れてくる魚を横取りしようとする。爆発音のあとの子どもたちの興奮ぶりはたいへんなもので、たとえば三郎という子どもは「瓜をすするときのやうな声」を出し、「六寸ぐらいの鰯をとって、顔をまっ赤にして喜」ぶ¹³。—ここで賢治の描きたかったのはまさに、善悪の彼岸に立って生を謳歌する子どもの＜子どもらしさ＞である。シュッコや三郎と同じく、ジョバンニもカムパネルラも「発破」を使った漁が密漁であることに頓着しないし、爆発によって気絶したり死んでしまう魚の悲惨な立場にも身をおくことはない。賢治は生き物の命を不要に奪うことを極度に嫌っていたが、生命力が倫理を圧倒したのか、ここにあるのは子どもの感じている生の喜びへの共感だけで、子どもの行動を諫める視線はない。爆発によって吹き飛ばされた魚がもし自分のうしろに居て見たら、何と思うか¹⁴などと理智がいくら耳もとで囁こうとも、賢治はこの子ど

もたちの喜びを手放すことはできなかった。

『さいかち淵』の「発破」は、沈み込んだジョバンニを元気づけるための特效薬として再利用された。じっさいこの発破がきっかけとなって、ジョバンニは「すっかり機嫌が直って」、自分に向けられたのではないかほるの問いかけにも「面白さうにわらって」答えを返すようになった。ジョバンニのわだかまりは消え、以後は彼も積極的に話に加わる。しばらくしてかほるやタダシと別れの時がくると、ジョバンニは、彼らに、僕たちといっしょに乗って行こうと誘いさえする。最後の「さよなら」を言う時は、ジョバンニも泣き出したいのを必死でこらえている。かほるとカムパネルラはあいかわらず仲がよいにもかかわらず、ジョバンニはそれほどまでに彼女に親しみをおぼえるようになっていた。その別れを惜しむ気持は、鳥捕りがいなくなった時よりも、ずっと強くなっている。

そして最後にやってくるのが、カムパネルラ本人との別れである。父は特別な人間ではないと感ずることができるようになっても、カムパネルラだけはまだ、特別でありつづけている。子どもの心を取り戻そうと、カムパネルラ像が変わろうと、カムパネルラとどこまでもいっしょに行きたいという願いそのものは依然として変わらない。

かほると出会ってからは、進むべき道も見えてきた。かほるがお父さんから聞いたという「まことのみんなの幸い」を願う歎の話が強くジョバンニの心を強く打ったのだ。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸いのためならば僕のからだなんか百べん灼いてもかまはない」と、かほるたちが去ったあと、ジョバンニはカムパネルラに呼びかける。我が身を捧げるべき「まことの」みんなの幸いを求めたいという、ジョバンニの熱い思いは誰にもよく理解できる。わかりにくいのは、なぜ彼がこれほどまでにカムパネルラに執着するのかということだ。

賢治自身は「小岩井農場（パート九）」の中で記している。「この不可思議な大きな心象宇宙のなかで／もしも正しいねがひに燃えて／じぶんとひとと万象いっしょに／至上添しにいたろうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから砕けまたは疲れ／じぶんとそれからたつたもひとつのた

ましひと／完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする／この変態を恋愛といふ¹⁵」と。ここでの賢治の定義にしたがえば、ジョバンニのカムパネルラへの想いも「恋愛」に近いもので、あるべき「宗教情操」から外れたものとなる。人は「たつたひとつのたましひ」と「永久にどこまでもいつしよに行かう」という実現不可能な願いに固執するから「さびしさ」に襲われる。逆に言えば、「正しいねがひ」に燃えていれば、愛する人がいなくなってしまうても嘆く必要はないということになる。この論理をさらに一步すすめれば、嘆く必要がないどころか、愛する人がいなくなることはいいことだという考えにも行き着く。—「いとしくおもふものがそのまゝどこへ行ってしまったかわからないことからほんたうのさひはひはひとびとにくる¹⁶」（『薙露青』異稿）。このような考え方から初期形のブルカニロ博士はカムパネルラの姿が消えた時、ジョバンニに次のように諭すのだ。

「(…) みんながカムパネルラだ。おまへがあふどんなひとでもみんな何べんもおまへといっしよに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。だからやっぱりおまへはさっき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しよに早くそこに行くがいに、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしよに行けるのだ」

このようなブルカニロ博士の言葉に触発されて、初期形のジョバンニは、「みんなのためにほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ」と誓う。しかし最終形では、ブルカニロ博士の助言もなければ、ひとりで幸福を探すというジョバンニの誓いの言葉もない。

「小岩井農場」が書かれたのは大正 11 年 5 月で、その年の 11 月に賢治の最愛の妹とし子が死ぬ。彼女の死によっておそらくは、賢治はジョバンニが感じたと同じようなさびしさをじっさいに味わっている。死の直後だけではない。とし子の死後半年以上も経て書かれたオホーツク挽歌詩群を読めば、賢治がいかに妹のことを忘れられないで苦しみ続けているかがわかる。たとえば「青森挽歌」には死の衝撃を歌ったこんな一節がある。「けれどもとし子の死んだことならば／いまわたくしがそれを夢でないと考へて／あたらしくぎくつとし

なければならぬほどの／あまりにひどいげんじつなのだ¹⁷」。あるいはまた、同詩には、「みんなむかしからのきやうだいなのだから／けしてひとりをいのつてはいけない」というような、ブルカニロ博士の言葉（「みんながカムパネルラだ」）を想わせる一節もある¹⁸。これが行き着いた一つの結論かとは思ふのだが、オホーツク挽歌詩群の最後の詩である「噴火湾（ノクターン）」には、思いがけない言葉が書き記される。「ああ なんべん理智が教へても／私のさびしさはなほらない／（…）／わたくしのかなしみにいぢけた感情は／どうしてもどこかにかくされたとし子をおもふ¹⁹」と。ここでいう「理智」は仏教用語で＜真如＞を悟る智慧を指すのか、あるいは一般的に、道理を理解するための理性を指すのか、賢治にとってはどちらも同じことであつたかもしれないが、いずれにせよ、この「理智」とは真理を論理的な言葉で説明することを意味するのであろう。言葉に頼って「ひどいげんじつ」を乗り越えるか、それともあれこれと計らうことなく、心の奥底から湧出する感情に身を委ねるのか、賢治の心は揺れ動く。

『銀河鉄道の夜』の改稿においてブルカニロ博士を消したのはおそらく、頭でどう考えようと、拭い去れないさびしさがある、「理智」ではジョバンニの「さびしさ」はなおらないと、自覚したためである。一方で、ブルカニロ博士がいなくても、ジョバンニは自分の力で立ち直り、自ずから「みんながカムパネルラだ」と結論づけることができると信じたためである。＜自ずから＞という点が重要である。「無意識即から溢れるものでなければ多く無力か詐偽である」（『農民芸術論綱要』）と賢治自身が述べている通り、自身の体験を咀嚼しつつ、無意識のうちに感じとったものだけがほんとうに身につくのだから²⁰。「断ジテ／教化ノ考タルベカラズ！²¹」という「雨ニモマケズ手帳」の言葉も、同じことを逆に言ったものだろう。とはいえ、いったいどうして賢治はジョバンニを信じることができたのか。

改稿にあたって賢治は何度も自身の書いた初期形を読み直したであろうが、おそらくその過程で、彼は＜子ども＞を再発見したのではないか。すでに見たように、「発破」にこおどる子どもの心をもち続けさえすれば、「さびしさ」は自ずから消えてゆくものなのだ。「石炭袋」で象徴される闇に入り込んで、たとえば何もかもが冷たい科学の「公式」で説明されるように思え、意気消沈

する時が来たとしても、子どもの想像力あるいは感性は、そこに一筋の光を見いだしてゆくだろう²²。じっさい、先生の説明では、銀河はがらんとした冷たいところであったが、ジョバンニにはそこは小さな林や牧場がある野原のように思えたではないか²³。さらに重要なのは、子どもには本来、自ら学ぶ力が具わっているということだ。このことを賢治は再認識した。ジョバンニは「大学士」のみならず、鳥捕りからも、かほるからも（あるいはかほるを介してかほるの父からも）学ぶことができたのだ。父親が特別でないとして理解することができれば、カムパネルラも特別ではないと気づくのもそう遠くはない。自然とかほるたちのような、たくさんの〈カムパネルラ〉が現れ、彼らといっしょに至上福祉への道を歩むことができるのではないか。賢治はそう考えたに違いない。ただここに大きな問題が、立ちはだかる。子どもはどんな状況でも、子どもでいられるわけではない。子どもが子どもらしさを発現できないような環境もあるのだ。子どもが向日性をもったふつうの子どもとして育つためには、それなりの土壌が必要であるが、ジョバンニにはそれがなかった。

さて、ここまで来てようやく、最終形において父親が帰還する意味が理解できる。

父親が帰ってくるという知らせをもたらすのは、「もう駄目です。〔川に〕落ちてから四十五分たちましたから」と、我が子の死んだことを宣告するカムパネルラの父である。カムパネルラの死と父親の帰還はいわば、引き換えなのだ。〈特別でない〉父親は〈特別な〉カムパネルラに代わる者として、ジョバンニの新たな旅の道ずれとなる。父親は、カムパネルラとの旅でジョバンニが取り戻した〈子どもらしさ〉を守ってくれるだろう。父親が帰れば、もう活版所で大人たちと一緒に働き、気を使いながらお辞儀を繰り返すこともない。放課後には級友と群れ遊ぶ時間もできる。新聞配達のために朝早く起きる必要もなく、睡眠も十分取れるので、授業でもぼうっとすることもなくなるだろう。父親に対してかつてもっていた無意識な負のイメージもすでに払拭されている。この〈新しい〉父親の庇護の下、ジョバンニは夢ではなく現実の中で、「みんなと一しょに」「みんなのほんたうの」幸いとは何かと、探し求めることになる。ブルカニロ博士が相談に乗ってくれなくとも、父親が帰ったあとには、たくさんの〈かほるたち〉との喜びに満ちた出会いから、いろんなことを学ぶことだ

ろう。

その後どうなるかはわからないし、わかる必要もない。近未来を暗示しながら、「一目散に」河原を町のほうに走ってゆくジョバンニの姿は、走っている途中でストップモーションになる²⁴。彼は悲しいときもうれしい時もいつも全力で走っていた。おっかさんに角砂糖を買って帰る時もそうだった。カムパネルラが仲間と去っていった時は町はずれまで「どンドン」走った。夢の中では、カムパネルラと二人で、「風のやうに」走った。そして今はお母さんにお父さんが帰ることを伝えるために走っている。—このように走るこそそのものが、子どもの潜在的な力の証しなのかもしれない。おそらくはジョバンニも成長して、青年期を迎え、大人への道をたどってゆくのだろうけれど、読者にとって<ジョバンニ>は、永遠に走りつづける子どもである。「賢治童話にとり、子供とは大人になるための予備軍ではなく、人間の人間による人間のための理想型として輝くものだ」と、中村文昭氏は言った²⁵。ジョバンニの場合は輝く「理想型」とまでは言いにくい、それでもやはり、走りつづける彼の姿は我々大人の目にはまぶしく映る。

注

¹ 『銀河鉄道の夜』には大正13年頃の執筆とされる第1次稿から、昭和6、7年頃に手を入れられた第4次稿まで、計四つの稿が残されている。ここでいう「初期形」は『校本宮澤賢治全集』（全14巻、筑摩書房、1973-1977年）第9巻に「本文」として掲載された第3次稿を指し、「最終形」は、同全集第10巻に「本文」として掲載された第4次稿を指す。以下、「初期形」、「最終形」からの引用はすべて、同全集に拠る。

² 下線は筆者。以下同じ。

³ たとえば統橋達雄氏は、「一種の“甘え”とでもいうべき精神的なまろさから脱却した」と言い（『宮沢賢治 少年小説』洋々社、1988年、76頁）、平岡弘子氏は「生き生きした少年らしさ」が感じられるようになったと言う（『改作過程におけるジョバンニの変容と成長』—『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』創元社、2003年、所収、263頁）。

⁴ 注3を参照。

⁵ 『校本宮澤賢治全集』第12巻上、632頁。

⁶ 村瀬学『銀河鉄道の夜』とは何か』大和書房、1989年、24頁を参照。

⁷ 『校本宮澤賢治全集』第12巻上、13頁を参照。

⁸ かはるとの会話で分かることだが、彼は瓶詰の蠅の標本も見たことがある。

⁹ 見田宗介『宮沢賢治』岩波書店（同時代ライブラリー）、1991年、21頁。

¹⁰ 工藤哲男氏は仏教的観点から、「鳥捕り」が、眞師同様、殺生罪を犯す生業であることを裏付けている（『賢治論考』和泉書院、1995年、205-214頁）。

- ¹¹ この意味が変わった「ふつうの人」は、吉本隆明氏のいう「何でもない人」に近いものとなる。「何でもない人」とは、氏によれば、「善をしても、献身しても、慈悲を施していても、無欲であっても、そのことに気づいていない無意識の行為の人」である（吉本隆明『宮沢賢治』筑摩書房、1989年、214頁を参照）。
- ¹² ここでいう「気の毒」とは、「すまないやうな気」と結びつけられていることから分かるように、上に立って同情するのではなく、辛さを察することができるという意味合いをもつ。言い換えれば、＜共苦＞を感じるということである。
- ¹³ 『校本宮澤賢治全集』第9巻、56頁。
- ¹⁴ 大正7年5月19日付の保阪嘉内宛書簡の中で賢治は書いている。「食はれるさかながもし私のうしろに居て見てゐたら何と思ふでせうか」（同上、第13巻、66頁）と。
- ¹⁵ 同上、第2巻、85頁。
- ¹⁶ 同上、第3巻、466頁。
- ¹⁷ 同上、第2巻、164頁。
- ¹⁸ 同上、166頁。
- ¹⁹ 同上、183-184頁。
- ²⁰ 同上、第12巻上、13頁。
- ²¹ 同上、73頁。
- ²² ちなみにこの「石炭袋」に関しては、「北いっぱい星空に」（異稿）の中で、こう記されている。「さあみんな公式だ／神はどこにもはたらかない／頭の上はがらんとして／銀河も別に無限でない／巨きな星が流れたら／どうだ銀河の小さな星が／そいつに食はれて／あとがすうっと黒くなったよ」（同上、第3巻、481-482頁）。
- ²³ 賢治は月についてこんなことを書いている。自分は、月の表面が「でこぼこの火口でおおわれている」ことを知っているし、月の「軌道や運転」が「簡単な公式」に従うことも知っているが、だからといってその天体を「月天子」と称して敬うことに何等の障りはない、と（同上、第12巻上、62-64頁）。賢治も、ジョバンニと同じ子どもの感性をもっていたのである。
- ²⁴ 初期形では、「走りはじめました」のあとにまだしばらく文章がつづくが、最終形では、「走りました」という言葉で、物語は止められている。賢治は最後に、＜走る＞イメージを鮮烈に残そうとしたのであろう。
- ²⁵ 『童話の宮沢賢治』洋々社、1992年、268頁。